

## 2-3 兵要地誌と宗道臣（少林寺拳法開祖）の生涯

堤 研二（大阪大）

本報告では、兵要地誌の情報収集に従事した人物であり、中国におけるその活動と並行して拳法の達人を訪ね歩いて習得した拳技をもとにしてそれらを集大成・体系化し、日本少林寺拳法の創始者（開祖）となった初代・宗道臣の行動の軌跡の概要を追跡する。

今から約 1500 年前、ダルマ（達磨）大師によって、現在のインド・パキスタン方面から嵩山少林寺（現在の中国河南省にある）に拳法が伝えられ、その地では座禅と並行して拳技修行が為されていた、と伝説ではいわれている。また、その技術の原型は古代インド拳法である、という説もあり、阿吽二体一対の仁王像はその形式を表現したものである、ともいう。こうした拳技は時の権力の庇護ないし政治的な弾圧による栄枯盛衰を経験していった。

少林寺拳法の開祖である初代・宗道臣は、昭和初期において特務機関のもとで兵要地誌関連の情報収集をしつつ、義和団事件後の弾圧によって中国各地に散らばったり潜伏したりしていた各種拳法の達人を訪問しながら拳法の技を習得し、日本に帰国してから自身の武術体験をふまえて、技術を体系化・再編成した。これが少林寺拳法である。

現在の少林寺拳法の組織には、大きなくくりとして「少林寺拳法グループ」（総裁は宗由貴・二代目宗道臣）があり、そのもとに「財団法人・少林寺拳法連盟」、「宗教法人・金剛禅総本山少林寺」、「学校法人・禅林学園」の三法人と「少林寺拳法世界連合」

（WSKO）がある。少林寺拳法経験者（拳士）はその数約 140 万人、現役拳士は 10 万人から 14 万人くらいであるといわれている。

その技術体系は、剛法・柔法・整法（整骨等）の三法二十五系から成り、中国拳法・空手・柔術・柔道・合気道・サンボ・ボクシングなどの技術も参考にしながら編成されている。少林寺拳法は単なる格闘技ではなく、思想的にも護身術としての位置づけが為されており、経絡秘孔（いわゆる「ツボ」、「急所」）を重視する点などの特徴がある。

日本軍部ないしその関連機関による兵要地誌や外邦図作製に関する情報収集は、中国大陸においては、すでに明治 20 年代から非合法的に行われていた。のちに、こうした活動に従事していたため、殉職しても靖国神社に祀られなかった軍人たちを合祀すべきであるという運動が生じているが、その請願書などを見ると、実に多方面にわたって明治期以降の日本軍部が軍人を各地に派遣して諜報活動に従事させていたことがわかる。

兵要地誌が収録する情報は多岐にわたる。対象地域の気候・土壌・植生・地形などは細かい地点のポイント情報を含む場合もある。例えば主要な道路の地盤であるとか、海岸であれば、上陸可能な地形かどうか、という戦術的な記載事項もあれば現地住民の「鎮撫」、現地の風土病の状況と治療法・治療薬に関する情報などの記載がある。一口に「兵要地誌」といっても必ずしも統一

の書式があったわけではない。こうした兵要地誌に関する情報収集には、軍人だけでなく、非軍人の特務機関員やネイティブな人員の協力が必要不可欠であった。

本報告に関していえば、中国各地の地誌情報の収集を中国人と協力しながら特務機関の日本人が行い、その総括は関東軍司令官クラスが行っていたのである。具体的にいえば、土肥原賢二大佐(後に大将となり、戦後の極東軍事裁判判決によって絞首刑となった)のもと、いわゆる土肥原機関の兵要地誌班員として兵要地誌情報の収集に当たっていたのが、日本人の中野理男(のちの初代・宗道臣)であり、その中国人の協力者が陳良という人物であった。中野は陳と組んで、地誌情報の収集と各地の組織との連携工作をしていたようで、その合間に拳技を習得していった模様である。

中野理男は、1911(明治44)年、岡山県英田郡江見村(現作東町)に生まれた。少林寺拳法開祖・宗道臣として亡くなったのは、1980(昭和55)年5月12日である。

彼は、1925(大正14)年、14歳の時に、奉天(当時の呼称。以下、中国の地名呼称には当時のものを記していることを了解頂きたい)の祖父のもとへ出立し奉天中学を修了後に一時帰国し、家族の相次ぐ病没によって一人身になってからは東京の頭山満宅に居候する。中野は1928(昭和3)年、17歳の時に、再度満州へわたって土肥原機関のもとで情報収集などの仕事に従事した。この間に陳良老師と知り合って白蓮門拳を学んでいる。なお、情報収集に関しては中国の種々の秘密結社のネットワークを利用し、またその為に中国人協力者の存在が必要不可欠であった、という。

中野は、1929(昭和4)年、18歳の時に兵要地誌作成の為、彼のいう「満蒙大旅行」を行い、遼寧省・吉林省からハイラル・ハロンアルシャン・熱河省を回って各地に残る拳技にふれた。そこでは軍事用地誌の為の情報収集、各地の組織との連絡が主目的であったが、チフスに感染したことから、翌年帰国した。帰国・療養後、各務原飛行隊に入るも、1931(昭和6)年、20歳の時に心臓弁膜症の為に除隊を余儀なくされた。そこで関東軍囑託・奉天陸軍特務機関での業務を行うべく三回目の渡満を行った。

1932(昭和7)年、21歳の折到北京に移り、特務の仕事継続しつつ、文太宗老師の門に入り義和門拳を学んだ。1936(昭和11)年、25歳の秋に西安へ行く途中で文老師とともに嵩山少林寺に立ち寄り、「義和門拳21代師父」継承の式を行っている。

この後には、特務機関での仕事からは直接的には次第に離れて、濱江省警務庁特務視察(鉄道警護隊員)となり、ソビエトとの国境の町、綏芬河に赴任し、さらに、1939年(昭和14)年、北辺振興計画に基づき新設された綏陽県の商工股(課)長となり同県商工会事務局長となって34歳で終戦を迎えた。

その後帰国し、その終戦時の体験をふまえて青少年育成を目的として、1947(昭和22)年、36歳の時に香川県仲多度郡多度津町において少林寺拳法を創始した。

少林寺拳法の思想では、拳技そのものの個人的な上達以上に「自己確立」と「自他共楽」の二つを重視して「理想境」・「平和社会」建設を大きな目標としているが、技術面だけではなく、この思想面にも兵要地誌関連の業務に従事した初代・宗道臣によ

る経験の影響が散見される。そこでは石原莞爾の影響(「協和」思想など)も見受けられるが、詳細な検討は別稿に譲りたい。

#### 文献

石井(藤井)素介(2000)『三河紀行素描』、空間・社会・地理思想 5、pp.61-75。

神谷 誠(1995)『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録 岡さのへち会記念文集』、創栄出版。

財団法人・少林寺拳法連盟(1997)『少林寺拳法五十年史』(第1部 正史) 同連盟(非売品)。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(自 明治二十八年 至 同三十九年 断片記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十年年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

参謀本部・北支那方面軍司令部 編(1939)『外邦測量沿革史』(明治四十一年度記事) 参謀本部・北支那方面軍司令部。

宗 道臣(1977)『少林寺拳法 その思想と技法』、日貿出版社(第16版)。

宗 道臣(1979a)『少林寺拳法入門』、徳間書店(第3刷)。

宗 道臣(1979b)『少林寺拳法教範』、総本山少林寺・日本少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1997)『初版 少林寺拳法教範』(復刻版) 財団法人・少林寺拳法連盟(非売品)。

宗 道臣(1998)『秘伝 少林寺拳法 禅の源流・中国伝来の護身術』(カッパ・ブックス) 光文社(第68刷)。

土肥原賢二刊行会 編(1973)『秘録 土肥原賢二 日中友好の捨石』、芙蓉書房。

中生勝美 編(2000)『植民地人類学の展望』、風響社。

秦 郁彦 編(2000)『日本陸海軍総合事典』、東京大学出版会。

福川秀樹 編(1999)『日本陸海軍人名辞典』、芙蓉書房出版。

藤原 彰 編・解説(1992)『外邦兵要地図整備誌』(十五年戦争極秘資料集 30) 不二出版。

源 昌久(2000)『わが国の兵要地誌に関する一研究』、空間・社会・地理思想 5、pp.37-61。

室賀信夫ほか・水内俊雄 解題(2001)『通称『吉田の会』による地政学関連史料』、空間・社会・地理思想 6、pp.59-112。